

中部の

エネルギーを 築いた



福沢桃介二世・駒吉のパイオニア精神

～その5：中部圏化学工業の自立への功績～

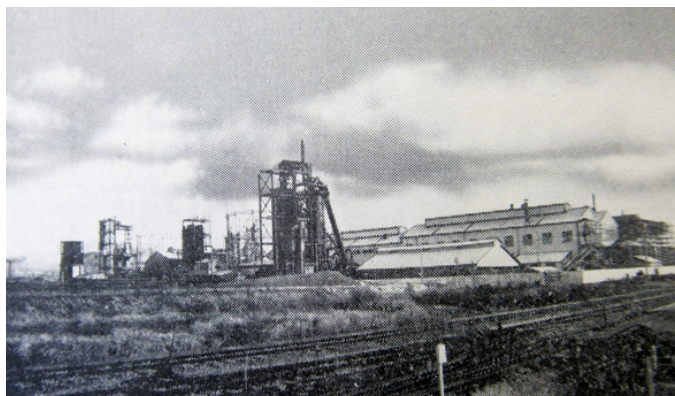
中部圏中枢の名古屋市の人口が100万人を突破したのは推計で1934(昭和9)年、翌年の国政調査では108万人に達した。まさに名古屋は国内第3位の都市の地位を確立した。昭和の初期から陶磁器、繊維に続く次世代産業、デトロイト構想による自動車産業、さらに名古屋港埋立地(臨海工業地帯)への重化学工業化振興策などが計画された。

矢作水力(株)は1919(大正8)年に矢作川水系の電源開発を目的に設立され、1928(昭和3)年に水力発電所と併せ、名古屋火力発電所(出力：14,000kW、所在地：名古屋市港区昭和町)を建設した。その後、天竜川水系の天竜川電力(株)を昭和6年、北陸を地盤とする九頭竜川水系、手取川水系の白山水力(株)を昭和8年に合併した。しかし同社は、他の電力事業者へ電力を供給する電力卸売会社としての性格が強く、大同電力、東邦電力や京都電灯などへ供給し、一般供給の比率が少なかった。当時、電力供給が過剰となったため、余剰電力活用を目的にアンモニア製造工場の建設が計画された。

1933(昭和8)年に(第1次)矢作工業(株)を設立し、アンモニア製造工場を竣工させた。工場にはアンモニア合成設備、硫酸・硫酸アンモニウム(硫安)、硝酸の製造設備が設置され、アンモニアの原料である水素を製造する電気分解装置が多量の電力を消費した。この主力商品は窒素肥料のひとつである硫安で、日中戦争下で食糧増産を目的に硫安に対する国家統制が強化され、円滑に事業を推進していくことが困難になり、1940(昭和15)年、矢作水力(株)と合併して同社の工業部となった。しかし1942(昭和17)年、電力国家管理の強化に伴い矢作水力は電気事業から撤退し解散した。

こうした状況下、同社の工業部は新会社に分離独立させて存続させることになり、解散前日の1942(昭和17)年3月31日付けで(第2次)矢作工業(株)が現物出資により設立された。同社は、1944年、同じ福沢系で水酸化ナトリウム(苛性曹達)・塩素生産工場を操業していた昭和曹達(株)と三井系の北海曹達(株)、レーヨン曹達会社の3社と合併し、アンモニア工業とソーダ工業の2部門を基幹とする化学メーカー・東亜合成化学工業(株)となり、1994(平成6)年に現在の東亜合成に成長した。

新年号は、東亜合成化学工業の成立過程と同社の設立を見て死亡した福沢駒吉の弔辞を紹介する。



創立時の矢作工業全景(出展：社史東亜合成化学工業株式会社)

福沢系曹達会社の成立過程

1 東海曹達株式会社～中部圏におけるソーダ工業の始まり～

ソーダ工業はあらゆる産業の基礎化学工業であり、各種の産業、例えば原料食塩、ガラス製品、紙パルプ、レーヨン、油脂、染料、医薬、アルミニウム生産に至るまで深く関係している。

中部圏における曹達工業の始まりは、11月号で紹介した苛性ソーダの電解製造法を確立した山崎甚五郎が名古屋電灯(株)南武平町変電所の隣地・東海曹達工業所での実証試験を踏まえて、1916(大正5)年東海曹達(株)を設立したことに始まる。その後、昭和曹達(株)が操業を開始したので1936(昭和11)年に閉鎖した。

2 昭和曹達株式会社

東海曹達に引き続き1928(昭和3)年に昭和曹達(株)を設立した。その概要は次のとおりである。

- ①資本金：150万円(払込資金：90万円)
- ②本社：東京市麹町区丸の内
- ③工場：名古屋市南区西築地
- ④主な役員：取締役社長福沢駒吉、常務取締役山崎久太郎(山崎甚五郎の義父)
- ⑤製造方法：アーレン・ムーア式電解法により苛性ソーダ、合成藍酸、晒粉などを生産

3 鶴見曹達株式会社

昭和曹達の同系会社として横浜市鶴見区に1934(昭和9)年アーレン・ムーア式電解法による鶴見曹達(株)を設立した。その概要は次のとおりである。

- ①資本金：150万円(払込資金：37.5万円)
- ②本社：東京市麹町区丸の内
- ③工場：横浜市鶴見区末広町
- ④役員：取締役社長福沢駒吉
- ⑤製造方法：アーレン・ムーア式電解法を採用し苛性ソーダ、合成藍酸、晒粉、液化塩素などを生産

4 四国曹達株式会社

四国曹達は福沢系ならびに四国方面における製系会社を中心に1935(昭和10)年に設立された。その概要は次のとおりである。

- ①資本金：150万円(払込資金：60万円)
- ②本社：名古屋市南区昭和町
- ③工場：香川県坂出町
- ④役員：取締役社長福沢駒吉
- ⑤製造方法：アーレン・ムーア式電解法を採用し、昭和11年より苛性ソーダ、合成塩酸、晒粉、液化塩素などを生産



昭和曹達の工場全景(出展：社史東亜合成化学工業株式会社)

三井化学工業系曹達会社の成立過程

1 北海曹達株式会社

北海曹達(資本金：300万円)は1918(大正7)年、富山県伏木の吉富磯一らにより北陸地方の電力が低廉なこと、伏木港の海陸運輸が便利であったことなどに着目し設立された。製造設備はアメリカから輸入したネルソン式電解槽を採用した。

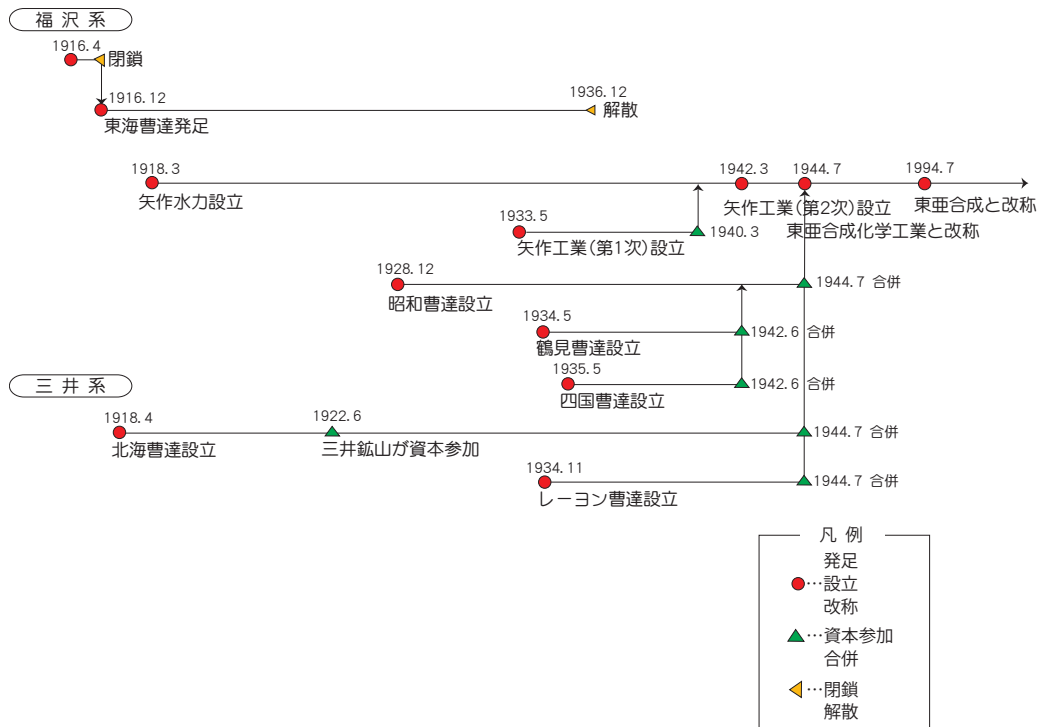
しかし第一次世界大戦後の不況により経営が行き詰まり、1922(大正11)年に三井鉱山㈱が株式を肩代わりし、三井染料工業所の坂本俊彦技師を工場長に招聘し三井系の会社になった。そして1931(昭和6)年にドイツのクレプス式を改良した北曹式水銀式電解工場を新設し、今までの高度晒粉、合成塩酸、塩

化アンモニアの他に高度な品質良好の苛性ソーダを生産した。さらに金属曹達工場を新設し三井鉱山染料工業所のインジゴ染料の原料供給に振り向け拡張していった。

2 レーヨン曹達株式会社

レーヨン曹達は1934(昭和9)年に北海曹達および東洋レーヨン㈱共同出資(資本金：150万円)のもとに設立された。工場は北海曹達㈱伏木工場の隣接地にあり、合成塩酸ガスとアンモニア・ガスとにより良質な塩化アンモニアを合成して製造するもので、苛性ソーダは東洋レーヨンに塩素は北海曹達㈱に供給していた。

(参考：東亜合成化学工業の成立過程)



東亜合成化学工業株の設立

第2次世界大戦の戦局が悪化するにつれて効率性向上が急務となったため、福沢駒吉が社長を務める福沢系化学メーカーは事業統合を推進した。

東亜合成の成立過程のように、まず1942(昭和17)年昭和曹達が鶴見曹達、四国曹達を合併、続いて1944(昭和19)年に三井化学工業系の北海曹達、レーヨン曹達を加えた3社が合併し曹達工業と窒素工業を擁する化学総合メーカー東亜合成化学工業が発足し、福沢駒吉が引き続き社長を務めることとなった。

しかしながら設立時の頃から体調を崩し、昭和19年取締役改選を機に社長を辞任し療養生活に入ったが、1945(昭和20)3月に急逝した。

東亜合成化学工業の葬儀に当たり荘原和作会長から次のとおり福沢駒吉への弔辞が捧げられた。

「君は仍父(じょうふ)の事業を継承し、電力事業の経営に縦横の才腕を発揮せらるると共に夙(つと)に化学工業に着目し、東海曹達株式会社を創立して、社長となり、業務に精進格励して業績の向上に尽瘁し、為に逐年業容の膨張を招来せり。かくてこれを母体と志、昭和・鶴見・四国各曹達会社を順次創立して業界一方の雄となり、又矢作工業株式会社を創設して安母尼亞(アンモニア)工業を興し、率先斬新なる技術を採用して、ついに斯業に一新機軸を画するの貢献をなせり。以って君の卓越せる識見と非凡の力量を知るに足る。

偶々、昭和16年大東亜戦争勃発し戦局の進展は国内諸制度の急速なる決戦態勢を促し、産業界亦一切の行掛りを排除して生産の画期的増強を要請せらるるに至るや、慧眼なる君は、君が主宰するアンモニア・曹達両事業を統合すると共に、北海・レーヨン両曹達会社を

これに合併し各社の有する設備・組織・技術を打って一丸となし、総合経営による事業の向上発展をきせんとして、昭和19年7月東亜合成化学工業株式会社の成立を見るに至れり。

然るにこの頃より君の健康勝れず、責任感に富む君は熱烈なる要望にも拘らず、同年11月取締役改選を機に遂に社長を辞任せらるるに至れり。

今や戦争愈々危急を告げ、化学工業の使命重かつ大を加へ、君が手腕と識見に俟つところ多かりしに、雄図空しく中道に殞られしは、君の不本意はもとより、吾社のため亦真に遺憾の極みなり。

しかれども君が多年拮据精励の功空しからず、吾社の基礎日に鞏固を加え、付託の重きに任じつつあり。君が終生の念願なりし化学工業翼賛の大業、着々として具現せられつつありと謂うべし。君以って瞑すべき哉。我等一同君が遺志を継ぎ挺身敢闘、誓って一途努力せん。希願わくは吾等の微力を終始見守り鞭撻せられんことを。

茲に東亜合成化学工業株式会社株主総会の決議により、微忱を捧げ以って敬弔の意を表す。

昭和20年5月30日

東亜合成化学工業株式会社



福沢駒吉

〔1891(明治24)～1945(昭和20)〕
(出展：続日本ソダ工業史)

今まで述べてきたように福沢駒吉は日本の電力王・福沢桃介の長男として生まれ、電気事業の経営者として発電所の建設を始め、各種の産業から我々の日常生活にまで広がっている食塩、ガラス製品、紙パルプ、レーヨン、油脂、染料、医薬、アルミニウム、石鹼、調味料などに至るまで関係している合成アンモニア工場、曹達工場の建設、硫安工場の建設などにあたり、当時、草創期にあった化学工業を中部圏に拡大、推進した。

(寺澤 安正)